

宮崎 神話

を辿る旅



神々が愛した降臨の大地

日本には、八百万の神々が住まうという。太陽や雨、風、奇石、巨木、あるいは獣、あるいは魚など、ありとあらゆる自然のものに、人々は神を見出してきた。国学者・本居宣長は日本人にとっての神を「可畏きもの」と呼んでいる。恩恵を受け敬う存在であると同時に、畏れるべき存在。そうした神の存在を現代の私たちが日常の中で感じる瞬間は、どれくらいあるだろう。数多くの神話が伝わる宮崎には、今もこうした「神さま」をすぐそばに感じる場所が点在している。その神代の物語を綴った、歴史書『日本書紀』が奈良時代に編纂されて1300年。神話に導かれ、宮崎へ。神さまたちに会いに行こう。

神さままたちのいるところ

日本書紀編纂1300年の宮崎へ

知ってる？ 日本書紀

Q 日本書紀と古事記を比べた 内容の違いを教えてください。

A 日本書紀は、天皇家に伝わる書物だけでなく、各氏族に伝わる伝承、書物などを幅広く収集し、「正史」として編集されました。例えば神話部分については、「正史」として認定した神話は大字で記すが、それ以外のものは、「一書曰…」と書き出し、全体を小書きで記し、注記として参考に載せるといった具合にです。また、古事記が稗田阿礼と太安万侶の2人がかりで4か月という急ピッチで編集されたのに対して、膨大な資料を収集して作られた日本書紀は約40年もの年月をかけて編集されました。神代の扱いは、古事記に比べると日本書紀は簡潔に書かれている印象がありますが、国外を意識していることは、書かれている内容からわかります。例えばヤマトタケルという英雄は、**古事記では「乱暴者で父である景行天皇から疎まれる存在」として描かれますが、日本書紀では「父、景行天皇からこよなく愛された英雄」として描かれます。**儒教思想が浸透していた当時の東アジア社会において、日本の正史のキーマンが父と不仲であるというのは、やはり据わりが悪かったのでしょうか。また古事記では山幸彦の妻であるトヨタマヒメは、出産の際に「サメ」の姿に戻ったと表現されています。しかし、日本書紀では「龍」の姿に戻ったと記されています。これも「皇帝は龍の子孫である」という当時の東アジア諸国の価値観を意識したものといえるでしょう。「中国の皇帝と同じように日本の天皇もすごいルーツを持っている」と国外にアピールしたかったのだと思います。

早速神さまに会いに宮崎へ！と言いたいところだが、まずは日本書紀の何たるかを知らずには、始められない。日本史の教科書で古事記712年・日本書紀720年と並べて覚えた人が大半だろう。しかし、どちらにもイザナギ・イザナミやアマテラスといった神々は登場する。古事記と日本書紀はどう違うのか。そもそも古事記のわずか8年後に編集された日本書紀とは一体なんなのか。ここはひとつ、専門家に教えてもらおう。

Q 古事記と日本書紀の違いを教えてください。

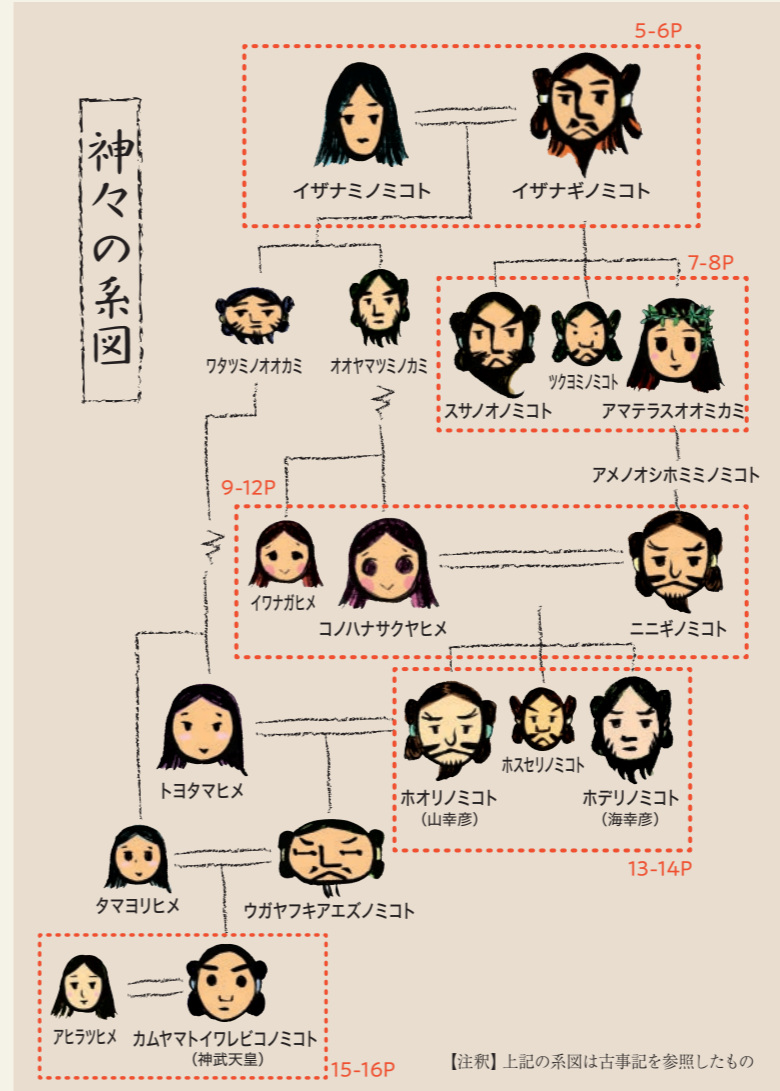
A 古事記と日本書紀はどちらも“日本の成り立ち”“天皇家のルーツ”を紹介している記録という意味では、同じ内容を書いている書物です。しかしこの二つには大きな違いがあります。まず、**古事記が全3巻**で神代（神話）から推古天皇（554-628）の時代までを書いているのに対し、**日本書紀は全30巻**で神代から持統天皇（645-703）までの時代を書いています。さらに、**古事記は国内向け**に大和言葉を使った和文で書かれていますが、**日本書紀は国外向け**に中国や朝鮮半島の人々も理解できるよう漢文で書かれています。古事記編纂は、天皇の即位の正当性や国の成り立ちを示し、国内共通の価値観を浸透させる目的がありました。対して日本書紀は、日本が中国や朝鮮半島の国々に対等の一流国家であることを示すために必要な歴史書でした。当時の東アジアでは、正史を持っていることが一流国家としての要件の一つでもありました。

Q 日本書紀を知って 宮崎を旅する楽しみ方を 教えてください。

A 近年、「聖地巡礼」といった小説や映画の舞台になった場所を巡る旅が話題になっています。神話の舞台が点在している宮崎を旅することは、1300年前から、人々に読み継がれてきた**物語の舞台を巡る、まさに「聖地巡礼」**といえるでしょう。古代の九州には、大宰府などの朝廷にとって重要な行政機関がありました。万葉集や風土記などの記述をみると、大宰府の役人たちが九州各地の神話伝承の舞台を訪ねて感慨にふけり詠んだ歌や記述が残されています。**日本人は昔から、物語と旅を結び付けて楽しんでいたのでしょね。**我々は旅をすることで、そんな彼らと同じ場所に立って、彼らが見ていたであろう景色を見て、悠久の時を超えて、彼らと心を通わせることができます。そんなことを思い浮かべながら宮崎にいらしていただければと思います。

Q どうして宮崎には 神話の舞台が数多く 点在しているのですか？

A 奈良時代、皇位継承は「日継」（ひつぎ）とも呼ばれ、皇位継承者のことは日を継ぐ者の意で、「ひつぎのみこ」と呼ばれていました。皇位継承において日（太陽）はそれだけ重要なものでした。記紀の記述をみてみますと日向（宮崎）は、太陽神、天照大神の誕生した土地であり、**朝日の昇る方角を土地が向いていることから、景行天皇によって「日向」（ひむか）と名付けられた土地**でした。また、ニニギノミコは天孫降臨の際、「この地は朝日が真っ直ぐにさし込み、夕日が赤々と輝く素晴らしい土地だ」と述べています。おそらく、日向（宮崎）は、記紀編纂当時の人々に、日（太陽）に関わる重要な土地として意識されていたのではないのでしょうか。そのような日（太陽）に関する意識から、日向（宮崎）は数多くの神話の舞台として描かれたのではないのでしょうか。



宮崎県立看護大学
教授 大館 真晴さん
1972年宮崎県生まれ。國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期修了、奈良県立万葉文化館研究協力員。主な著書に『日本書紀の作品論的研究-人物造形のあり方を中心に-』（國學院大學大学院研究叢書）、『日本書紀【歌】全注釈』（共著、笠間書院）、『日本書紀と古代天皇の謎』（共著、株KADOKAWA）など

神々に
出会う
場所

みそぎ池

全国の神社で神職が奏上する祝詞。その中で最初に読まれる一節に「掛けまくも畏き伊邪那岐大神(いざなぎのおおかみ)、筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原(あはぎはら)に、禊ぎ祓へ給いし時に…」とある。これは黄泉の国から戻ったイザナギが穢れを祓うために身を清めた際に神々が生まれたことを伝えており、その場所とされるのが「みそぎ池」だ。夏になると睡蓮の葉が水面を覆い、黄色い花が美しく咲き誇る。

宮崎市阿波岐原町産母
☎0985・39・7308(市民の森管理事務所)



江田神社

みそぎ池より歩いて約5分の場所にある。イザナギ・イザナミの2柱が祀られている江田神社は、10世紀初期に記された『延喜式』にも書かれている古社だ。古くから信仰を集めてきた歴史的価値の高い神社だが、江戸時代初期に起こった地震・津波により社殿が失われ、現在の社殿は昭和初期に建てられたもの。森に包まれるように佇む姿は派手ではないが、神秘的な雰囲気を感じ神前に向き合うのは希少な体験となるだろう。

宮崎市阿波岐原町字産母 127
☎0985・39・3743

小戸神社

「小戸」は、みそぎ池と同じく神職が奏上する祝詞に登場する。約1900年前に創建されたと言われており、江戸以前までは「小戸大明神」と呼ばれていた。当初は宮崎市内を流れる大淀川の河口付近、小戸の瀬に建てられていたが、江田神社同様に津波の被害を受け、のちに現在の場所へと遷座された。毎年大晦日には、イザナギの御身禊に倣い、一年間の罪や穢れを祓う「みそぎ祓」が行われ、青年団を中心にふんどしに鉢巻の正装で寒中の大淀川で身を清める。

宮崎市鶴島 3・93 ☎0985・23・6684



東霧島神社

火の神を生み命を落としたイザナミ。妻の死を嘆いたイザナギが落とした涙が固まってできたといわれる「神石」がある「東霧島神社」。その神石は刃物で切断したようにスッパリと割れており、妻を亡くした悲劇が二度と起こらないようイザナギが斬ったと伝わる。この時に用いたとされる「十握(とつか)の剣」は神社の神宝として祀られている。境内にはほかにも、鬼が一夜で築いたという「鬼岩階段」も。



宮崎県都城市高崎町東霧島 1560
☎0986・62・1713

すべての始まりは、この夫婦から

イザナギ・イザナミ



ストーリー

はるか昔、この世に天と地が現れた時、下界はまだ混沌とした海を漂う油のような状態だった。神々が現れたが、後に現れた男女一対の神様イザナギとイザナミが命を受け、天の沼矛を天上から下ろし、かき混ぜると、いくつも島ができた。これが、国の始まりである。夫婦となったイザナギ・イザナミからは35柱の神々が生まれたが、火の神を生んだ際にイザナミは命を落とし、黄泉の国へ。妻の死を嘆いたイザナギは黄泉の国へ迎えに行くが、妻は「私はすでに黄泉の国の食べ物をお口に穢れてしまいました。神々に戻れるよう頼むので、こちらを見ないで待っていてください」と告げる。しかし、約束を破り覗いてしまったイザナギの目に映ったのは、醜悪な姿へと変貌していた妻の姿。逃げ出した夫を、怒り狂った妻が追う。イザナギが黄泉の国を出て入り口を岩で塞ぐと、イザナミは「あなたがつくる人間を一日に1000人殺してやる」という。イザナギは「ならば私は一日に1500人をつくらう」と返す。こうして、人間には寿命ができたと言われている。

大館教授ポイント

妻からの「覗かないでくださいね」という約束を破ってしまう夫イザナギノミコト、「私に恥をかかせたわね」と怒り、雷と黄泉国の軍勢を差し向ける妻イザナミノミコト、女性に恥をかかせてしまい、女性から怒りを買ってしまうなんて現代でもありそうな話ですね。ひょっとしたら、この話は、女性に恥をかかせてはいけないという、今に通じる教訓にもなりそうです。



【注釈】古事記と日本書紀の物語では、一部内容が異なる場合があります。本誌では、日本書紀(正伝)のみならず、古事記や日本書紀の別伝の内容も取り入れて「神々のストーリー」を記載する。また、神々の名前についてはわかりやすいよう古事記での名前を使用。カタカナで表記し、「ノミコト」などは一部省略している。

神々に
出会う
場所

あまのやすがわら
天安河原

岩戸に隠れてしまったアマテラスに出てきてもらうにはどうするか。八百万の神々が集まって相談した場所といわれている。奥行約30メートルの巨大な洞窟「仰慕窟（ぎょうぼうがいわや）」には、訪れた人々が願いを込めた石積みが無数に置かれており、神さまが今もすぐそばで見守っているような感覚になれる神秘的な雰囲気。



宮崎県高千穂町大字岩戸 1073・1
☎0982・74・8239(天岩戸神社)



あまのいわと
天岩戸神社

天照大御神を主祭神とする天岩戸神社。そのご神体は、天岩戸そのもの。東西二つの社殿があり、西本宮拝殿の裏に回ると実際に天岩戸を観ることができる天岩戸遥拝所があり、時間毎に神職が案内してくれる。境内にはアメノウズメが手に持って舞ったとされる「招霊(おがたま)の木」なども。

宮崎県高千穂町大字岩戸 1073・1 ☎0982・74・8239



◆ アマテラスの
トリビア ◆

アマテラスの娘たち

有名な岩戸隠れのエピソード。その原因となったスサノオの乱暴ぶりだが、古事記ではそれにより女官が死亡してしまったとあるが、日本書紀ではアマテラス自身が怪我をしたとされている。また、誓約の際にスサノオは5柱の男神を生んだが、アマテラスもまた3柱の女神を生んだ。この三女神が、福岡県の宗像大社に祀られている。

世界が太陽を失った日

アマテラス

ストーリー

イザナギの御身褻で最後に生まれたのがアマテラスオオミカミ・ツクヨミノミコト・スサノオノミコトの三貴子。太陽神であるアマテラスは、光り輝く存在であったため、イザナギにより天上の高天原を治めるよう命じられた。一方、スサノオには海原を治めるよう命じられるが、スサノオは母に会いたいと泣くばかり。ついには神の国を追い出されてしまう。スサノオは母が住む根の国へ行こうとするが、その前に姉であるアマテラスに挨拶をしてからと高天原へ向かう。力の強いスサノオの来訪に、「高天原を乗っ取りにきたのでは」と疑ったアマテラスは武装して出迎える。潔白を訴えるスサノオは「誓約」で占うことを提案。スサノオが神を生み、女神が生まれれば邪心がある、男神が生まれれば潔白というもの。結果は5柱の男神が生まれ、スサノオの潔白は証明された。

岩屋へとその身を隠し閉じこもってしまった。太陽神であるアマテラスが岩屋に隠れたことで世界から光が失われた。困り果てた八百万の神々は、天安河原に集い相談をする。そして岩屋の閉ざした戸の前で大宴会を始めたのだ。芸能の神であるアメノウズメが樽を逆さにした上で着物が脱げんばかりに踊り、それを見て神々は天が揺れるほど楽しげに笑う。岩屋の中で賑やかな様子を聞いていたアマテラス。一体何の騒ぎかと外を覗いてみる。するとアメノウズメが「貴女様にも勝る貴い神様がおいでで、皆よろこんでいるのです」というではないか。気になったアマテラスが身を乗り出した瞬間、力の神であるタヂカラオが岩戸を開き、アマテラスを引っ張り出した。こうして、世の中に光が再び戻ったのである。



大館教授ポイント

アマテラスオオミカミは太陽神とされますが、太陽は大いなる恵みも日照りももたらす存在です。スサノオノミコトは暴風雨の神とされる荒々しい神ですが、一方で、その荒々しさから疫病を祓う力強い神ともされています。古代の人々にとって神とは、敬うべき存在でもあり、畏れるべき存在でもあったのでしょうか。



神々に
出会う
場所

たかちほのみね

高千穂峰

鹿児島県との県境に位置する標高 1,574m の山。宮崎県側に山頂があり、天孫降臨の伝承を物語る逆鉾が立てられている。この逆鉾がいつ頃誰によって立てられたのかは謎に包まれたまま。天孫降臨の際にニニギノミコトが探索のために使った鉾だとか、イザナギ・イザナミが国生みの際に混沌をかき回すのに使っただとか、想像を掻き立てる。

宮崎県高原町



くしふる

穂觸神社

天孫降臨の地、「日向の高千穂のくしふる峰」と記される峰の中腹にある神社。山そのものがご神体として古くから信仰を集めてきたが、300 年ほど前に延岡藩主らの寄進により社殿が建設された。天孫降臨の際に、神々がこの地で力くらべを行ったことが、相撲の始まりであるともいわれている。

宮崎県高千穂町大字三田井 713
☎0982・72・2413(高千穂神社)

真名井の滝(高千穂峽)

高千穂の代名詞ともいえる、高千穂渓谷に流れ落ちる滝。その源流は、「天の真名井」という湧水で、ニニギノミコトが降臨した際に水が無かったため、高天原より水の種を運んできたものといわれる。渓谷は柱状節理の岩壁が連なり、自然の力に感動するとともに人ならざる神秘的な力を感じさせる。

宮崎県高千穂町大字三田井御塩井
☎0982・73・1213(一般社団法人 高千穂町観光協会)



荒立神社

案内役としてニニギノミコトを待ち受けたサルタヒコは、最初に言葉を交わしたアメノウズメと結婚をしている。その際に、周辺にあった荒木を使い急ごしらえで宮を造ったという伝承から「荒立」の名が付けられたとされている。天上の神と地上の神が結ばれたことから「国際結婚のはじまり」とも。

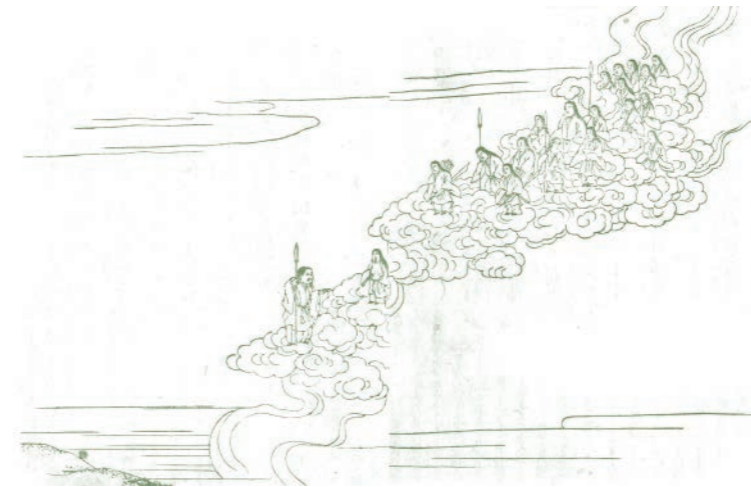


宮崎県高千穂町大字三田井 667
☎0982・72・2368

天孫降臨 高天原から高千穂へ

ニニギノミコト

ストーリー①



アマテラスは、子のアメノウズメを呼び、地上の世界である「葦原の中つ国」を治めるよう伝えるが、アメノウズメは「私が地上に降りようと準備をしている間に子どもが生まれました。この子、ニニギ

ノミコトを遣わせるのがよいでしょう」という。それを受け、アマテラスはニニギノミコトに地上へ降りるよう命じる。その際に、タヂカラオやアメノウズメなど、天岩戸で活躍した神々も従えて降臨した。しかしいよいよ地上に降りようという時、道中に天と地の両方を照らしている神の姿がある。アメノウズメがその神に名を問うと、「私は国つ神(日本土着の神)であるサルタヒコと申す。天の御子が地上に降りられると聞き、先導役を務めるべくお待ちしておりました」と答える。この案内に従って、一行はついに地上へと降り立った。この時、アマテラスより「三種の神器」と呼ばれる八咫鏡、八咫瓊勾玉、草薙剣が授けられた。一行が雲を押し分けて降りたのは、筑紫の日向の高千穂の霊峰。ニニギノミコトは「ここは朝日が海から真つ直ぐに射し昇り、夕陽がいつまでも輝く素晴らしい国だ」と述べ、天にも届くほどの立派な宮殿を建て、住むこととした。

大館教授ポイント

ついに神が地上に降臨しました。ニニギノミコトはアマテラスの孫にあたりますから、「天孫降臨」という言葉の通りですね。ここからストーリーは子・山幸彦(ホオリノミコト)、孫・ウガヤフキアエズ、ひ孫・神武天皇へと繋がっていきます。後述しますが、天から降り立ったニニギノミコトが山の神の娘と結ばれ、山幸彦は海の神の娘と結ばれます。つまり、初代天皇である神武天皇に至るまでに、天の力に加えて山と海からも加護を得ている。こうした物語を古事記・日本書紀などの歴史書に記すことで、天皇家の正当性を伝えていたのでしょう。



ニニギノミコトの
トリビア

幕末の英雄も大はしゃぎ!

高千穂峰の山頂に立てられている逆鉾。見ていると神々が降り立ち鉾を立てた光景が浮かんで来て、まさに神話の舞台といった印象で気分も盛り上がる。しかし盛り上がり過ぎて NG 行為を犯してしまったのが、幕末のスター・坂本龍馬。新婚旅行で高千穂峰に登った際、「逆鉾を抜いて戻した」と姉への手紙に記している。当時は人の目も厳しくなかったとはいえ、神代の遺物を前に幕末の英雄も気持ちが高まったのかもしれない。現代人は、決して触れないように。

神々に
出会う
場所

う つ む ろ こ ゆ
無戸室・見湯の池

コノハナサクヤヒメが出産の際に産屋を建てた「無戸室」。文字通り、産屋には戸が無く、火をかければ絶対に逃げられない状況。コノハナサクヤヒメが美しいだけの女性でないことが伝わるエピソードだ。近くには、海幸彦・山幸彦を含む三人の子どもの産湯に使われた「見湯の池」も。

宮崎県西都市大字三宅
☎0983・41・1557(西都市観光協会)



え の さんりょう

可愛山陵

ニニギノミコトが眠る墓地といわれる場所で、宮内庁より「御陵墓参考地」の指定を受けている。西南戦争の際には、西郷隆盛が近くの民家に滞在しており、新政府軍が御陵墓地向けて攻撃はできないと踏んだためか…ともいわれている。

宮崎県延岡市北川町長井
☎0982・46・5010(延岡市北川地域振興課)

しろみ
銀鏡神社

ニニギノミコトに妹と共に嫁いだものの送り返されてしまったイワナガヒメ。彼女は毎日鏡を見ては嘆き悲しんでいた。ある日鏡を見ると、竜のように恐ろしい顔が映る。驚いて投げつけた鏡は西都市銀鏡の竜房山の山頂に飛んできて、麓の村を明るく照らしたという。銀の鏡から地名が付いたこの地の神社には、イワナガヒメと父・オオヤマツミノカミが祀られている。

宮崎県西都市大字銀鏡492
☎0983・41・1557(西都市観光協会)

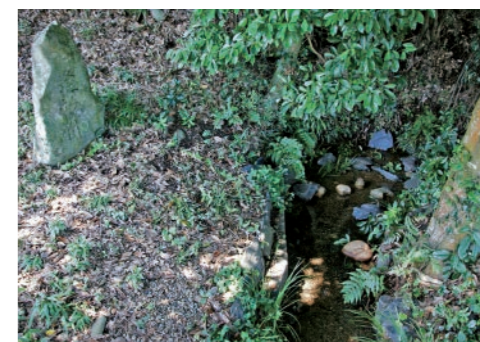


ストーリー②

地

上へ降りたニニギノミコトは、ある日、水を汲みに川を訪れていたコノハナサクヤヒメという美しい女性に出会う。一目惚れをしてその場で求婚をすると、「突然のことなので…。父が返事をするでしょう」とコノハナサクヤヒメ。父親で、山を司るオオヤマツミノカミは大いに喜び、コノハナサクヤヒメと共に姉のイワナガヒメも一緒に嫁がせる。しかし容姿が醜かったイワナガヒメは送り返されてしまう。「コノハナサクヤヒメを妻にすれば花が咲き誇るような繁栄を、さらにイワナガヒメを妻にすれば岩のように揺ぎ無い永遠の命を得られたものを」。ニニギノミコトは永遠の命を失い、人間のように寿命に縛られるようになった。こうして幕を開けたニニギノミコトとコノハナサクヤヒメの新婚生活は、わずか一夜で終わりを告げる。反乱を押さえるためにニニギノミコトは出征してしまうのだ。お腹に宿った命を守り育てながら、夫の帰りを待つ

コノハナサクヤヒメ。しかし、戦から戻った夫は、妻の妊娠を喜ぶどころか「一夜で身ごもったというのか。他の神との子ではないのか」と疑いを向ける。「お疑いなら、証明してみせます。天の御子のあなたの子であるなら、火の中でも無事に生まれてくるでしょう」。コノハナサクヤヒメは産屋に火を放ち、その中で子どもを出産。命を懸けて身の潔白を証明したのだ。この時生まれた子どもが、海幸彦(ホオリ)と山幸彦(ホオリ)である。



ニニギノミコトとコノハナサクヤヒメが出会ったとされる逢初(あいそめ)川(宮崎県西都市大字三宅)

壮絶な兄弟喧嘩の果てに

海幸彦と山幸彦

ストーリー

海

幸彦（ホデリ）と山幸彦（ホオリ）は成長し、それぞれ海と山で獲物をとって暮らしていた。ある日、山幸彦は海で魚を釣り上げる兄を見て、「自分も釣りがしてみたい」と提案し、しぶしぶ了承してもらった。互いの道具を一日交換してみませんか」と提案し、しぶしぶ了承してもらった。兄の釣り針を無くしたことから大喧嘩に発展。何をしても許してくれない兄に途方に暮れていた山幸彦だが、シオツチの助言を受けて海の宮殿に行く。海の神ワタツミの娘・トヨタマヒメに出会う。結婚し幸せに暮らしていた山幸彦だったが、3年後に無くなった針を探し出して陸へと戻る。その際にワタツミから「針を返す時には呪いをかけて返しなさい。兄は3年のうちに落ちぶれるだろう。あなたを妬んで戦を仕掛けてきたなら、潮の満ち引きを操るこの二つの珠を使い懲らしめてやりなさい」と助言をもらう。二つの珠を授かり陸へと戻った山幸彦は兄との争いを制し、ニニギノミコトの後を継いだ。

神々に 出会う 場所

青島

海の宮殿から帰ってきた山幸彦が辿り着いたのは青島という小さな島。周辺は波の浸食によって削られた奇石「鬼の洗濯板」が囲む。島の大部分を占めるのは亜熱帯植物の枇榔（ピロウ）。浜辺もあるが、砂ではなく大小様々な貝殻が蓄積し形成されている。江戸時代までは聖域として一般人の立ち入りが禁じられていた。島内には青島神社や天孫降臨以降の神話を蠟人形で再現した日向神話館がある。

宮崎市青島2・13・1
☎0985・65・1262(青島神社)



潮の井

山幸彦がワタツミより授かった潮の満ち引きを操る珠をご神体とする鹿野田神社。その境内には「潮の井」と呼ばれる不思議な井戸があり、海から10kmも内陸にあるにも関わらず水が塩辛く、潮の満ち引きに合わせて水位も変動するのだという。

宮崎県西都市鹿野田 2020



うと 鶴戸神宮

トヨタマヒメが出産するための産屋が建てられたとされる洞窟の中に本殿がある。日向灘に面した断崖の中腹にあり、石段を降りて本殿に向かう下り宮。社殿の裏にはトヨタマヒメが海へ帰る際、子どものために自分の乳房を残したという「お乳岩」など、境内にも様々な伝承が残る場所が点在している。

宮崎県日南市大字宮浦 3232 ☎0987・29・1001



うしおだけ 潮嶽神社



宮崎県日南市北郷町北河内 8901・1
☎0987・55・3252

海に加護を受けた山幸彦との戦いに敗れ、海幸彦は山奥に逃げ落ち、居を定めたとする。その地に建てられている潮嶽神社は、日本で唯一海幸彦を祀った神社。この地域では、海幸彦・山幸彦の伝承から“他人に縫い針を貸してはいけない”という習俗があるそうだ。一説には、海幸彦は九州南部の豪族・隼人の始祖だともいわれる。

海幸彦と山幸彦の トリビア

あの昔話が繋がる…?
海の宮殿で美しい姫と出会い、時を忘れて過ごす…というストーリーに「浦島太郎」の話の思い出した人も多いはず。一説には、海幸彦・山幸彦神話がモデルになったと言われており、日本書紀には「浦嶋子(うらのしまこ)という若者が吊り上げた大亀が女性に変わり、二人で海中の蓬莱山へ行った」と記述がある。

神話から伝説へ

日本をひとつにする神武東征

神武天皇

天の御子として地上へ降り山の神の娘と結ばれたニニギノミコト、海の神の加護を受けた山幸彦、海の神の娘を母に持つウガヤフキアエズ。天・山・海の力を三代に亘り身に着けた末に誕生したのが、のちに日本の初代天皇となる神武天皇だ。幼名を「サノノミコト（狭野尊）」、奈良で天皇として即位するまではカムヤマトイハレビコという名で呼ばれていた。高千穂の宮殿で国を治めていたカムヤマトイハレビコだが、兄と相談し「天下を治めるために東に行こう」と決意、日向を発つ。美々津から船出をし、豊国の宇沙（大分県宇佐市）を経由し、筑紫国の岡田宮（福岡県北九州市）に滞在。そこから瀬戸内海を通って畿内へと入る。道中、地方豪族たちとの

戦を重ね、兄の戦死などの苦難を乗り越えて熊野（和歌山県新宮市）へと上陸を果たし、ついに大和（奈良県）へと進軍。即位して初代天皇である神武天皇となったとされている。この「神武東征」と呼ばれる英雄譚で、神話の世界と人の世の世界を結んでいる。カムヤマトイハレビコが誕生から45歳までを過ごした日向国（宮崎県）には、多くのゆかりの場所が残されている。やはり神代から時代が近くなったからだろうか、生誕地や居住地に加え、産着を洗った池、初めて馬に乗った場所など、数多く伝承の内容も具体的に、訪ね巡ると皇子が成長していく過程を追体験するようでもある。

神々に 出会う 場所



宮崎県高原町大字蒲牟田 117
☎0984・42・1007

狭野神社 [生誕の地]

カムヤマトイハレビコ(神武天皇)の生誕地といわれている狭野(さの)の古社で、霧島山の噴火に伴い社殿を現在の場所に移した歴史を持つ。一直線に1kmほど伸びる杉並木は国の天然記念物に指定されており、秀吉から朝鮮出兵の命を受けた島津義弘が先勝祈願をし、そのお礼参りとして奉納したという。

宮崎神宮 [15歳から東征まで居住]

神武天皇の孫にあたるタケイワタツノミコトが九州の地を治めるよう命じられ長官として赴任した際に創建したと社伝に残る。森に囲まれた参道には灯籠が灯り、凜とした空気の中を本殿へと進む。「宮崎」は「宮の先(前)」を語源とするが、一説には宮崎神宮のことを指しているともいわれる。



宮崎神宮 2・4・1
☎0985・27・4004



吾平津神社 [妻が祀られる社]

江戸時代までは乙姫大明神と呼ばれていた。神武天皇が宮崎で暮らしていた頃の妃であるアヒラツヒメを祀った神社。二人の間には皇子が生まれていたが、アヒラツヒメは東征に同行はせず、この地に残って道中の無事を祈ったという。



宮崎県日南市材木町 9・10
☎0987・22・2863

皇宮屋 [政務を行った地]

東征に発つまで神武天皇が住んでいた宮殿の跡といわれており、宮崎神宮から歩いていくことができる丘の上にある。神武天皇は15歳からこの地に宮居して政(まつりごと)を行っていたという。



宮崎県下北方町横小路
☎0985・27・4004 (宮崎神宮)

美々津 [東征に向けて出発]

日向市の南端に位置し日向灘に面する港町。神武天皇はこの地より東征に向けて出航したとの伝承が残ることから「お舟出の地」と呼ばれている。出航の予定が天候の変化により急遽早まったため、従者が神武天皇の衣の綻びを立っまま縫ったことから「立縫(たちぬい)」という地名も残っている。江戸時代は港町として大いに栄え、商家の建物が今も多く残る。



宮崎県日向市美々津町 ☎0982・58・0661 (美々津まちなみセンター)

大御神社 [出発前に祈願]

神武天皇が美々津から出発する前に、航海の安全と武運を祈願するためこの地に天照大御神を祀ったとされる。江戸時代には延岡藩主や天領代官、地域の人たちからも厚い信仰を寄せられ、「日向のお伊勢さん」と呼ばれていた。本殿裏手の柱状節理が見事。

宮崎県日向市伊勢ヶ浜 1 ☎0982・52・3406



御池 [幼少期を過ごす]

都城市と高原町にまたがる直径約1kmもの大きな湖で、約4,600年前の噴火により形成されたもの。幼い皇子が兄たちと共に水遊びを楽しんだといわれており、7つの港のうちのひとつ「皇子港」からは天孫降臨の伝承が残る高千穂峰を臨むことができる。

宮崎県都城市・高原町

神楽

聖なる庭に神が降り立つ
神と人とが繋がる日

神楽の世界で神々に出会う

宮崎の神楽。ただ舞台で舞うのではなく、まず氏子たちが神を神社などに迎えに行く儀式から始まり、舞台上に注連で仕切られた「神庭」という聖域を設ける。序章で「神降ろし」の演目を行い、地区によっては33演目12時間以上をかけて夜を舞い明かし、最後に天上の飾りから紙吹雪が降る中、神を天上へと送り出すなど、神の降臨が重要視されている。「伝統芸能」と一括りにしてしまうには些か人間の領分を超えているようだ。宮崎県内各地の集落、およそ200以上の保存団体が、神楽を継承し続けている。九州各地に祭りや奉納踊りはあるが、同じ「神楽」が伝播し、これだけ多くの集落で独自性を持ちながら受け継がれているという地域は、宮崎において他にないのではなからうか。そしてこの神楽によって、古くから人間たちは神と交流を重ねてきた。

宮崎の神楽の起源に関する明確な資料はないが、県内でも有名な「高千穂の夜神楽」は、高千穂が神武天皇上陸の場所・紀伊の熊野神社の荘園だったことから、熊野信仰の修験者たちに

より流入し、各地へ広がったと考えられる。

宮崎の神楽は、大まかに分けて7つの系統に分かれている。高千穂系神楽・椎葉系神楽・霧島神舞など、神楽が行われる時期や時間帯、演目などが異なっているが、どれも地域ごとに大切に守り継がれてきたものだ。夜神楽が有名なだけに、「神楽は夜行われるもの」と認識している人も多いが、これも県央を境に県北部では11月から2月にかけて夜神楽が多く行われ、県南部では2月から5月にかけて昼神楽が行われる場合が多い、と地域によって異なる。一口に「宮崎の神楽はこういうもの」と言い切ることが難しく複雑だが、人々の暮らしの中に溶け込み守り継がれたからこそ多様性。それこそが宮崎の神楽の醍醐味といえるだろう。

1. まずは神社に神様をお迎えに。「神迎え」の神事を終えると、舞台を敷く「神楽宿」まで練り歩く「道行き」で神を招く。*地域により呼称は異なる

2. 「天岩戸開き神話」をテーマにした演目「岩戸五番」（高千穂の夜神楽）。アミノウズメの優美な舞い、岩戸を投げ飛ばすタヂカラオの力強さに、観る者も息を飲む

3. 神楽宿は民家だったり公民館だったり地域ごとに異なる。宿泊できる「宿」ではないので夜神楽を観る場合はホテルなどを確保しよう

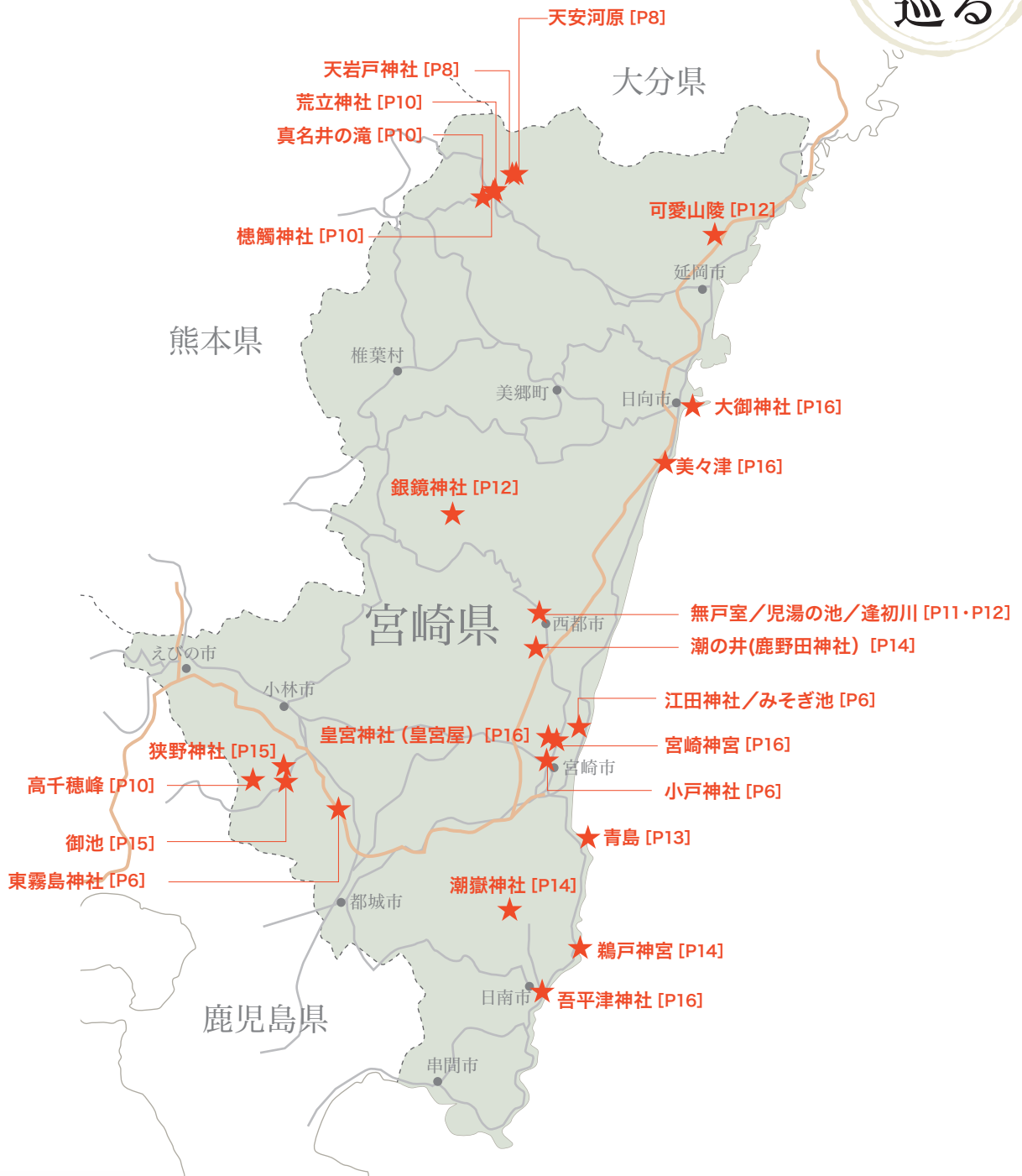
4. 高千穂系・諸塚神楽は県下でも特に神楽面が多く伝えられているのが特徴。一堂に会す様は圧巻。写真は3柱の怒れる神々が神職と問答を繰り返す「三宝荒神」（諸塚・南川神楽）

5. 米良系・西米良神楽が奉納される米良神社はニニギノミコトから返されてしまったイワナガヒメが主祭神。神楽の中に息づく悲しみの物語を、地域の人は愛し続ける（西米良・小川神楽）

6. 料理やぜんざいなど「振る舞い」が行われることも。地元で採れた野菜の煮物や猪肉を使った汁物など、ここにも地域の特性が感じられる。しかし振る舞いはあくまで地域の人たちの好意なので、感謝していただく。
*地域によっては振る舞いが行われないこともある

*神事や設え、演目は地域により異なる。地域の人たちにとって大切な祭りなので、観光客は節度を持って参加させてもらおう。詳しい参加のルールは神話のふるさとみやざきのHP (www.kanko-miyazaki.jp/shinwanofurusato/)を参考に

神々の 場所を 巡る



宮崎県 総合政策部
国民文化祭・障害者芸術文化祭課
記紀編さん記念事業推進室

☎0985・26・7099
FAX0985・26・7414
kikihensan@pref.miyazaki.lg.jp



神話のふるさと
みやざき
Facebook

